

令和元年6月21日現在

機関番号：62618

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13232

研究課題名（和文）方言圏論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創生

研究課題名（英文）Resuscitation of geolinguistics under integration of the dialectal radiation theory and the theory of division of dialects

研究代表者

大西 拓一郎 (Onishi, Takuichiro)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・教授

研究者番号：30213797

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ともすれば対立関係にとらえられがちな方言圏論と方言区画論を統合することで新しい言語地理学を創り出すことを目的とする。共通する目標である方言形成を中心課題におき、広域・狭域の詳細な方言分布の経年データを具体的に活用することで、(1)常識になっていた方言圏論の事実が現れてこないということ、(2)学史上放棄されてしまっていた方言区画論の想定していた区画的な領域の存在が顕在化してきた。地理空間に生きる人間の使う言語として方言をとらえる観点を再度導入することで、言語地理学は本来の目標を取り戻せることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

方言分布を考察するにあたり、言語変化ならびに言語としての方言の持つ機能、方言の地域間相関の一般性と特異性に及ぼす人間の移動、方言を使う人間の社会構成や農産物を中心とした物流と空間領域のありかた等、言語はもちろんのこと、言語のみに閉じない知見からの分析を積極的に活用することで、方言圏論と方言区画論を再考し、方言学の究極の目標である方言形成論を中核とした言語地理学の構築を進めた。

研究成果の概要（英文）：This study purpose to restart geolinguistics with integrating the dialect radiation theory and the theory of division of dialects; both of them have been thought as opposite theories. Both theories have common purpose in dialect formation where I put the goal in. I analyze the time span data of dialectal distributions of wide and narrow area. It has been appeared (1) it is hard to capture the radiating fact of dialects, (2) changes corresponded to dialectal division. Geolinguistics can resuscitate with adopting the view that dialects are language used by people living in geographical space.

研究分野：方言学

キーワード：方言形成論 方言圏論 方言区画論 言語地理学 方言分布の経年比較 領域形成 言語変化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

柳田国男を創始者とする方言圏論と東條操に始まる方言区画論は、ともに地理空間上における方言のありかたを扱いながら、個別事象の分布を重視するか、総合的観点に立つべきかなど、研究目標まで含め、鋭く対立した。方言区画論は諸地域の記述と分類を進め、日本方言研究会編(1964)『日本の方言区画』により頂点に達する。一方、方言圏論は永らく理論的展開や具体的成果をあげないままであったが、1970年代以降、柴田武(1969)『言語地理学の方法』を契機に大きく発展し隆盛を迎える。その裏で方言区画論は輝きを失い、過去のものとして置き去りにされた。しかし、これまでに蓄積された方言分布データを分析すると、現実の言語変化は方言圏論に必ずしも沿うものではなく、方言区画論が想定したような一定の「領域」を設定することが要求されてきた。このような現実データを説明するために、双方を再考し、融合する形で、方言の地理空間上のありかたを総合的に扱う、新たな言語地理学を創生することが求められる。

2. 研究の目的

方言圏論と方言区画論を統合することで、新しい言語地理学を創り出すことを目的とする。方言を地理空間的に扱う研究は、方言圏論と方言区画論の二つの立場に分かれるが、両者は創始者間で鋭く対立した。約50年前に迎えたその終局は、論理的展開によるものではなく、学の時流の中での閉幕であった。半世紀を経て、方言の地理的情報が蓄積され、それら进行分析する技術がGISとして確立した。そこで見えてきたのは、本来、両論は対立関係にあるべきものではなく、具体的データの上で相互の理解を活かし、方言の地理空間上の成立過程の解明に向かうという方向であった。本研究は、それを達成する、新しい言語地理学を創生することを目指す。

3. 研究の方法

地理空間上の方言分布を説明する分野としての言語地理学を創生するという目標を確認する。その目標を達成するため、次の3点を実施する。

- (1) 方言学の伝統の中で行われてきた方言圏論と方言区画論を批判的に読み解く。
- (2) 方言分布の経年比較を実施し、分布領域の確認と形成過程の考察を行う。
- (3) 関連分野の研究を参照・活用する。

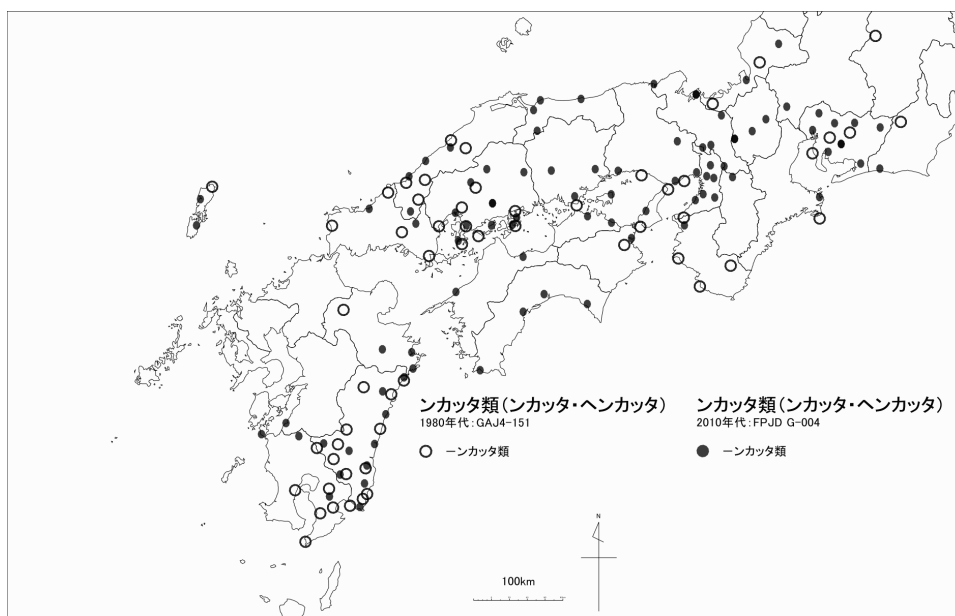
以上で得られた成果ならびに知見をもとに、方言圏論と方言区画論を統合した、新しい言語地理学を立ち上げる。

4. 研究成果

時代の異なる方言地図をもとに方言分布の経年比較を行うことで、実際に方言の変化が分布として、どのように現れるのかを検討した。動詞否定辞の過去形(～しなかった)に現れる新形式のンカッタをもとに以下の点が明らかになった。

- (1) 変化は特定の地域を埋めるように広がる。

たとえば、近畿地方では大阪府を、東海地方では愛知県を埋めるような広がり方が、下図のように確認された。



- (2) いったん形成された分布は維持される。

変化は継起的に連続するわけではなく、言語として安定した後は、その状態が維持される。上記の動詞否定辞過去形のンカッタは、全国的に見た場合、新潟県でもっともはやく始まり、そのようすは、20世紀初頭の言語地図で確認される。そして、その状態は21世紀に至るまで

維持されている。

(3)方言間の類似度と距離には一定の関係がある。

基本的に距離が離れるほど、方言間の類似度が下がることが一般則として確認される。その際に、語彙と文法には異なりがあり、近距離の場合は文法の類似度が高く、遠距離になると文法の類似度は語彙よりも低くなる。

また、住民の組織的移動があった場合には、上記の関係は保持されない。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

大西拓一郎、方言語彙の分布の変動、方言の語彙 日本語を彩る地域語の世界 (シリーズ日本語の語彙 9)、査読無、2018、116-131

大西拓一郎、交易とことばの伝播 とうもろこしの不思議を探る、日本語学、査読無、37 巻 9 号、2018、36-45

大西拓一郎、方言変化の自律と介入 革新ダラと保守ズラ、CEL、査読無、118 号、2018、48-51

大西拓一郎、方言分布が見せる「坂」「崖」「峰」、CEL、査読無、117 号、2017、48-51

大西拓一郎、方言形成論序説 言語地理学の再興、方言の研究、査読有、3 号、2017、5-28
Onishi, Takuichiro, The Relationship between Area and Human Lives in Dialect Formation, dialect| dialect 2.0: Long papers from 7th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG)、査読無、2017、274-289

大西拓一郎、新しい方言の形成 行カンカット・飲マンカットの生まれるところ、CEL、査読無、116 号、2017、48-51

大西拓一郎、方言は生きている 混ざることによる変化、学鏡、査読無、114 巻 2 号、2017、18-21

大西拓一郎、言語変化と方言分布 方言分布形成の理論と経年比較に基づく検証、空間と時間の中の方言 ことばの変化は方言地図にどう現れるか、査読無、2017、1-20

大西拓一郎、方言の動詞否定辞過去形に見る日本語の重層性、日本語学、査読無、36 巻 2 号、2017、14-24

大西拓一郎、方言地理学の研究動向、方言の研究、査読有、2 号、2016、83-97

〔学会発表〕(計 4 件)

大西拓一郎、方言から考える動詞否定辞中止形、日本語文法学会第 19 回大会シンポジウム、2018

Onishi, Takuichiro, Japanese dialectal words for imported produce that include proper nouns: *morokoshi* ("China"), *nanban* ("southern countries"), and other place or person names, Komatsu Round-Table Conference on Geo-linguistics, 2018

Onishi, Takuichiro, On the relationship of the degrees of correspondence of dialects and distances, SIDG Congress 9, International Society for Dialectology and Geolinguistics, 2018

大西拓一郎、方言分布・言語地図データベース 時空間情報を持つ言語データ、第 23 回公開シンポジウム 人文科学とデータベース、2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：沢木幹栄

ローマ字氏名：Motoei Sawaki

所属研究機関名：信州大学

部局名：人文学部

職名：名誉教授

研究者番号（8桁）：20110116

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。